



Title	方方『武漢人』に見る武漢人：池莉「武漢話題」との比較を通して
Author(s)	瀬邊, 啓子
Citation	大阪大学言語文化学. 1999, 8, p. 112-127
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78051">https://hdl.handle.net/11094/78051</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 方方『武漢人』に見る武漢人

— 池莉「武漢話題」との比較を通して —\*

瀬邊 啓子\*\*

近幾年，在中國逐漸關注起來了“中國人觀”。自從出版了《中國可以說不》之後，比如像議論“北京人”，“上海人”這樣城市的論作也大批出現在了中國的圖書市場上。1995年，浙江人民出版社開始出版“都市人叢書”。這個叢書里就有武漢的女作家方方所寫的《武漢人》。

將通過這本《武漢人》要透視出武漢人究竟有什麼樣的特徵，同時研究為什麼方方這樣的是外來人，才能寫出“武漢人”的客觀緣由。

的確方方不是武漢人。可是她可以算是武漢人，因為她從小一直住在武漢。她也認定自己是武漢人。不過有時候周圍的武漢話對於她來說有一種說不出的陌生感，覺得自己同武漢人有那一點區別，那就是因為她不會說地地道道的純武漢話。

武漢位於中國的中心。雖然武漢方言屬於北方語言，但是人們的觀念上武漢究竟是北方還是南方的問題說起來並不那麼簡單。實際上北方人認為武漢是南方，南方人又認為武漢是北方。因武漢是坐落在“九省通衢”之地，武漢兼有南北各地的特色：比如菜、文化以及人們的性格等等。因此，人們一般說武漢沒有什麼特色，對於這種說法武漢人並不願意多做什麼辯解，但這並不表示武漢人是內向的。可事實上武漢也具有它獨特的味道。

據方方所言：武漢人因受漢口商業氣息較濃厚的市民文化的影響及其束縛，所以對於人們的各種論說不敢主張自己的見解。方方並沒有受這樣的制約，不但在書中刻畫出了武漢人的特徵，而且也替武漢人道出了純粹的武漢人之論。方方是外地人，也同時是武漢人。武漢又兼有南北方特色。方方可以站在外來人這種客觀的立場上來看武漢，

\*方方《武漢人》所看到的武漢人 — 同池莉《武漢話題》相比較 — (Keiko SEBE)

\*\*言語文化研究科博士後期課程

也可從武漢人這種角度來論武漢。是不是正因為兩者的這種雙重性的吻合，才使方方道出了地地道道的武漢論即“漢”味。

像方方那樣經歷過“文革”的那一代都在“尋根”。而方方的“根”到底要落在哪里。既不是自己的祖籍，更不是自己出生的地方，却是現在生活在那里的武漢。對於方方來說，寫武漢既可以讓人們更多地了解武漢，也為武漢做了宣傳，更是通過寫武漢來尋自己的“根”。最終她想把“根”落在武漢。

## はじめに

近年、中国においても「中国人論」が注目を浴び、それと同時に地域性という点に注目した「北京人」論や「上海人」論といった論著が多く出版されるようになった<sup>1)</sup>。このことは中国の人々の興味が地方とそこに暮らす人々に向かっていることを示している。それは1つには商業的な理由で商売相手を理解したいということもあるが、文化大革命（以下、文革と表記）以降、「尋根（ルーツ探し）」という動きの中から派生した地域文化に対するアイデンティティーの欲求の高まりにも端を発していると考えられる。特にここ数年は『ノーと言える中国人』<sup>2)</sup>のような中国と他国を比較したものや、『中国人も愛読する中国人の話』<sup>3)</sup>といった地域性を取り上げたものが日本でも翻訳出版されており、このような中国の議論が世界的にも注目されていることを示している。

<sup>1)</sup> 楊東平・『城市季風—北京和上海的文化精神』（東方出版社、1994）や「閑話中国人系列」（注3参照）など。前者は「本書がきっかけとなって、中国では地域の特性を論じた類書がブームになって」（『北京人と上海人—攻防と葛藤の20世紀』趙宏偉・青木まさこ訳、NHK出版、1997、p.345）おり、版を重ね、台湾でも出版されるなど、注目を集めている。

<sup>2)</sup> 宋強、張藏藏、湯正宇、古清生、喬迎（莫邦富、鈴木かおり他訳）『ノーと言える中国人』日本経済新聞社、1996。原著『中国可以說不』は中華工商聯合出版社から1996年5月に出版され、中国国内外で反響を呼んだ。引き続いて、同11月に続編『中国不低價說不』が出版され、その後同じ様な書物が陸続と出版され、大きな議論を巻き起こした。

<sup>3)</sup> 中華人民共和國民政部、中国社会出版社編、朔方南訳、はまの出版社、1997。原本は1995年に中国社会出版社が「閑話中国人系列」というシリーズで刊行。『批判』北京人』（楊軍等編）、『“剖析”上海人』（陶郎等編）などの形式で北京人、上海人、広東人、東北人、山東人を取り上げている。日本語版は上下2冊で上册を北京、上海、下冊を広東、東北に充て、山東人は省いている。

こういった動きの中で浙江人民出版社から「都市人叢書」<sup>4)</sup>が出版され、各地の作家がその都市論や地域人論を発表している。10万字前後の小冊子にその地域の食・言語・気質などの項目を挙げ、各都市の特色を分かり易く論述している。また作家の個性が反映されており、非常に面白く出来ている。

このシリーズの中で、新写実小説の担い手の一人であり、武漢の作家でもある方方が『武漢人』<sup>5)</sup>を担当、描写している。本論では方方『武漢人』を題材に、方方が「武漢人」をどのように捉え論じているのかを、他の地域との比較及び池莉「武漢話題」<sup>6)</sup>との比較を通して見てゆきたい。さらに生粋の武漢人ではない方方がどうして「武漢（人）論」を創り得たかについても考察を加える。

### 1. 方方にとっての「武漢弁」の存在

方方は1955年11月、南京市に生まれ、1957年に一家で武漢に移り、それ以降武漢で生活をしている。したがって生粋の武漢人ではない。本名は汪芳、方方というペンネームは「芳芳」という幼名から来ている。『武漢人』「自序」の冒頭部でまず「私がこのような『武漢人』という本を書くのは、ずっと不適切だと感じてきた。それというのも、私は生粋の武漢人ではなく、武漢人がほとんどいない宿舎で暮らしていた幼いころから現在に至るまで、私の武漢弁<sup>7)</sup>は依然としてあまり正確ではないからだ」(p.1)と述べる。しかし、また自分の来歴が武漢と共にあったことを述べた上で、「本籍の上では武漢人ではないけれども、私自身の心の中ではすでに私は武漢人だと思っている。こういうことを言う理由は、私がこの街を心から愛しているからだ」(p.3)とも語っている。更に、「これは武漢に住む余所者が書いた武漢と武漢人に関する本に過ぎない」(p.3)とも断っており、自らの微妙な立場—余所者でもあり武漢人でもある—に対する複雑な感情を吐露している。

中国では本籍がどこであるかということはよく問題にされる。例えば、方方の

<sup>4)</sup> 1995年に林文詢『成都人』、阿成『哈爾濱人』が出版された。翌年、『成都人』は第2版が出され、その好評ぶりが窺われる。1997年1月に楊牧之『西安人』など数冊が出版され、同4月に李公明『広州人』とシリーズの数を増やしている。

<sup>5)</sup> 浙江人民出版社、1997

<sup>6)</sup> 『真実的日子』(池莉文集4)江蘇文化出版社、1995

<sup>7)</sup> 原文は「武漢話」。「武漢方言」という言語学的な表現もあるが、方方や池莉の使用する「武漢話」には武漢弁という訳を充てるのが適切と思われる。

本籍は江西省彭澤県である。南京に生まれ、武漢で育ち、本籍地に暮らしたことがないにも関わらず、『中国新時期文学詞典』（丁柏銓主編、南京大学出版社、1991）では「江西省彭澤の人」（p.12）と書かれる程である。本籍は中国語で「祖籍」や「籍貫」と言うように、その土地との祖先からの繋がりを表している。これは中国が農業を主体としてきたことで、土地との繋がりが密接であったことの名残であり、多くの場合その人のアイデンティティーと関連している。このため、作家の本籍・出身地というのは重視される。

「都市人叢書」の中でも、ほとんどの作家がその「序」で自分の出身地について触れている。多くは、林文詢『成都人』のように「間違いなく、私は成都人だ。生粋の成都人とも言える。ここで生まれ、ここで育った、(略)」<sup>8)</sup>と簡単に触れるのみである。『西安人』<sup>9)</sup>を担当した楊牧之は、方方の場合と同様に生粋の「西安人」ではない。しかし、「私の本籍は西安ではないが、私はこの街ですでに38年も暮らしている。(中略)49年の人生の旅路において、38年を西安で過ごした。もう秦人〔陝西省中部人〕と言えらるう」<sup>10)</sup>と述べ、また「西安市民の一人として、余所の人に西安を紹介する。西安を紹介することは、自分の義務である」(下線部引用者)<sup>11)</sup>とする。ここで注目すべきなのは、楊牧之は簡潔に自らを「西安人」と認め、「西安人」として筆を執っている点である。上記のように楊牧之は幼少期は西安では過ごしておらず、ただ38年という時間を過ごしているだけである。一方、方方も1997年の段階で40年間武漢で暮らしたことになり、楊牧之と比べて何ら遜色はない。つまり「武漢人」として、『武漢人』に取り組んでも構わなかったはずである。では、どうして方方には余所者感が付き纏っていたのだろうか。

方方は自らのアイデンティティーを本籍地や生地を求めるのではなく、長年暮らした「武漢」に求めている。これは方方が文革期に幼青年期を過ごした世代であることと深く関係している。その紅衛兵世代とも呼ばれるこの世代は、文革終息前後信奉してきたイデオロギーの崩壊により、「無根〔アイデンティティーの喪失〕」現象を起こし、その傷を癒す「傷痕」と「尋根」の流れにより、地域に根ざしたアイデンティティーの創造を早急に求めていた。一方、長く圧迫されて

<sup>8)</sup>「幾句実話（代序）」（『成都人』浙江人民出版社、1995）p.1

<sup>9)</sup> 浙江人民出版社、1997

<sup>10)</sup>「我寫西安人（代序）」『西安人』p.1

<sup>11)</sup> 同上

いた地方文化は、この時期改革開放に伴い復権を果たし、地域の独自性が認められるようになった。このような背景の下、方方がそのアイデンティティーを自らが成長した武漢に求めるようになったものと考えられる。ところが、方方は長年暮らしている武漢にいても余所者であること—武漢からの拒絶—を感じていた。そのキータームが「武漢弁」である。

前述したように、方方は自分が完全な武漢人ではないと言うとき、その根拠の1つとして武漢弁の不正確さを挙げている。また「我認識の幾個武漢人 [私の知る武漢人]」（『武漢人』）でも何人かの武漢人を紹介するとき、その基準として「武漢弁」を挙げている。

この武漢市最古の古い通り（長堤街）で生まれ育った董宏猷は自ずと我々外來の武漢人より誇りをもつ素地がある。少なくとも彼の武漢弁は我々が話すのより正確で、彼の武漢料理は我々より上手く（以下、略）。

〔（ ）内、引用者〕（p.146）

彼（王振武）はほんとうに生粋の武漢弁が話せるが、あまり使わない。私たち武漢弁がよくできるとは言えない人と話をするときには、普通話か手を加えた武漢弁を使う。

〔（ ）内、引用者〕（p.153）

このようにその人が話す武漢弁によって「武漢人」度を測っている。同じく引用部で、生粋の武漢人である王振武が余所から来た生粋の武漢人ではない方方たちに対しては、生粋の武漢弁を使用することがなかったことも分かる。これは拙論「中国現代小説における武漢弁使用の一考察」<sup>12)</sup>でも触れているが、武漢弁が自他—武漢人か否かを区別する1つの手段として使用されていることを示している。また方方のみならず多くの人が、武漢弁によって武漢人であるかどうかの度合いを測っていることが分かる。つまり、武漢人にとって武漢弁というのは、アイデンティティー顯示の道具立ての1つとなっているのである。

方方にとって、この武漢弁という基準の存在が自分が本物の武漢人ではないことを痛感させる要因となっている。だからこそ方方は『武漢人』の冒頭部と結びの1節に、自分が武漢人であると言うことができ、如何に武漢が好きであるかと

<sup>12)</sup>『大阪大学言語文化学』Vol.6、1996

いうことを綿々と綴っているのである。それは一方で、方方の疎外感を表しているとも言える。

## 2. 武漢人の気質

方方は武漢弁によって自らのアイデンティティーの揺らぎを感じ取っている。しかしながら武漢人が極端に排他的と言うわけでもない。

武漢人は上海人や広州人とは違いそんなに排他的ではない。そこ（上海、広州）の人が土地の言葉以外の方言を聞くと、たちまち態度が極めて悪くなるが、武漢人はそういうことはない。反対に武漢人は余所者にことに親切である。少なくとも土地の人に対するよりも友好的だ—河南人を除いては。

〔（ ）内、引用者〕（『武漢人特別的眞』『武漢人』p.50）

河南人に対する感情は歴史的なもので、ここでは詳述はしない。武漢人は同じ武漢人に対してよりも、余所者に対しての方が親切である。このことは、池莉が「武漢話題」で「普通余所で故郷のなまりを聞くと、特に親しみを覚えるが、武漢人だけはただ単に懐かしい感覚があるのみで、めったに抱き合ったり、仲間や親戚のように付き合ったりすることはない」（『眞実的日子』p.172）と述べているように、武漢人は取り立てて出身地を理由に1つに纏まろうとはしない。方方「外地人看武漢人 [余所者から見た武漢人]」（『武漢人』）によると、同じ武漢人が困っているのを見ればすぐ手を差し伸べる。ここから武漢人は不愛想であるが、根はやさしいことが分かる。しかし、一般に武漢人の気質はよくないと言われている。この「名声」が全国的に広まったのは文革初期のことである。もともと武漢弁は発音の仕方から、‘きつい’という印象を与える。そのため武漢人の気質も‘きつい’と考えられがちであった。文革初期の武力闘争が激しかったころ、恐れられることが英雄視に繋がった。そのために、一種の悪循環が生じた。武漢弁の印象によって生じた誤解が、武漢人を増長させ、その‘きつさ’を増していったと、方方は「外地人看武漢人」で考察している。現在は武漢人の気質はそのサービスの悪さで知られており、文革以降もその悪名を留めている。

武漢人はそのきついと言われる気質や不愛想さから極端に排他的に思われがちである。しかし実状は上述のようにそれ程排他的ではなく、むしろ好意的である。

ところが、田舎者に対しては、この寛容さは発揮されない。

しかし武漢人は非常に田舎者を蔑視する。武漢人が田舎者を懲らしめだしたら本当にずっと手をゆるめることはない。それがレストランであろうとバスの中であろうと、病院であろうとだ。田舎者が武漢に来たら、苛められない場所はないと言える。  
(「武漢人特別的真」『武漢人』p.50)

このように武漢人が田舎者を蔑視することは顕著な特徴であり、池莉「不談愛情」(『上海文学』1989年1月)でも、何代も前から都会に暮らす者(吉玲の父親)が、そのプライドから田舎者を蔑視する姿として描かれている。池莉もこの点を武漢人の短所として上げている。

しかしながら、武漢の大きさも武漢人に致命的な弱点を1つ与えている。それは盲目的な尊大さだ。武漢人は自らを都会人と認じているので、少しでも自分に及ばない者に対しては、一律に軽蔑し、人を「郷巴佬[田舎者]」と蔑称する。  
(池莉「武漢話題」『真実的日子』p.176)

このように武漢人の田舎者蔑視は相当なものがある。これは武漢の劣等感の裏返しなのではないだろうか。武漢は大都市であり、また政治的にも、経済的にも中心となりうる要素を持ちながらも、如何なる意味でも中心地にもなったことがない。そのことが武漢人のプライドを傷つけ、武漢より劣る田舎に対する蔑視に繋がっているのである。池莉が武漢人の悪癖として、農村や中小都市出身者の前では尊大であるのに対して、北京や上海といった武漢よりも大きな都市出身者の前では媚び諂い、見るに絶えないと述べている<sup>13)</sup>ことは、その傍証の1つとなる。以下の記述から、武漢人の微妙な心理状態を推し量ることができる。

<sup>13)</sup> 池莉は「このような盲目的な尊大さと一緒に培養された悪習には目下の者を馬鹿にし目上の者に媚びる、弱きを苛め強きに媚びる、貧しい者を苛め富める者に媚びるところがある。農村の人たちの前や中小都市の人の前では横暴である。しかし手には携帯電話、スーツに革靴、頭にはオイルの所謂“大款[ニュー・リッチ]”の前や(武漢)より大きい都市、例えば北京や上海の類の前では、武漢人は荒ぼくごつごつした武漢弁を軟化させ、へつらって笑い、満腔の情熱で、ただ上手く取り入ることができないことを恐れている。武漢市にあまねく行き渡り、各階層に浸透している、この醜い態度は至る所で見られ、本当に恥ずかしい思いをさせられる」(「武漢話題」『真実的日子』p.176)とし、武漢人の態度に批判的である。

李東は武漢人への見方に話が及ぶと、かつて武漢『長江日報』で見た武漢は南であって南でなく、北であって北でない、少し「夾生」<sup>14)</sup>であるという観点に非常に賛成であると言った。武漢人は一旦何かを行うと、絶対に一番落ちこぼれにはならないが、一番前を走ることもできない。武漢人は戦争では湖南、四川人に及ばず、商売では広東、上海人に及ばず、試験では江蘇、浙江人に及ばず、義侠では東北、西北人に及ばず、言論では北京、天津人に及ばない。しかし武漢人はどんな分野でも第3、4位に位置する。だから総合すれば、すごいのだ。武漢人が武漢を一度出れば、ほとんどの人がその実力を発揮し、総合的な資質でうまいことやる。かくの通り見れば、武漢人も見くびることができないのだ。

(「我認識的幾個武漢人」『武漢人』pp.152-153)

これは方方が武漢人の企業家李東の話として述べた部分である。ここには他の都市との比較から生じる武漢の劣等感と、それをよしとしない武漢人のプライドが混在している。どんな分野においても1番にはなれないが、総合力においては他を凌駕する、と言うことで自己のプライドを満足させようとしている。この心理と同じ働きをしているのが、田舎者蔑視である。武漢が他の都市と比べて劣っていると感じるからこそ、都市から見て劣っていると考えられる田舎に対して優越感を抱くのだ。悪く言えば、田舎に自己の姿—他から立ち後れた姿—を投影し、近親憎悪に似た感情を持って、嫌悪しているのである。

池莉はこの田舎者蔑視に対して非常に批判的で、問題視するが、方方は田舎者へ蔑視の強烈さに触れてはいるものの、それに対する評価は下していない。

武漢は方方の言に拠れば中国第7の都市<sup>15)</sup>であるにもかかわらず、政治や経済でリーダーシップを取ったことがなく、街からも武漢人の気質からも突出した特徴が窺いにくい。

<sup>14)</sup> 「夾生」は武漢においてはよく口の端に登る罵語で「二百五 [あほ、うすのろ]」の意味と似ている。方方によると「“夾生”は人の揚げ足を取るのが好き、そして仕事が上手く行かず難癖をつける人に対してびたりと合う」(『有趣的武漢話』『武漢人』p.61)ということだ。ただし「二百五」と異なり何をやっても中途半端な人に対しても使う。

<sup>15)</sup> 方方は「大都市の概念からすると、武漢はずっと中国でとても名のある都市で、私が数えたところ、その知名度は恐らく北京、南京、西安、上海、天津、広州の6都市に次ぐものである」(『武漢這個地方』『武漢人』pp.1-2)としている。

武漢人の性格はその実とても独特のものだ（これはある種の「夾生」と言う人もいる）。武漢人はこずるいが、上海人のようにあんなに計算できないし、あんなに利己的ではない。武漢人は聡明だが、広東人のような表に出さない沈着さ機敏さはない。武漢人は義理堅いが、燕趙の士のように「士為知己者死 [士は己を知る人のために死ぬ]」という義侠とは少し異なり、よく己のために少しの余地を残している。（以下、略）

（「武漢人特別的真」『武漢人』 p.49）

このように、武漢人氣質は突出した点がない。しかし逆に武漢人は様々な地方の特色を兼ね備えている、とも言える。これは武漢の街そのものの性格と関係しているのではないだろうか。方方も「武漢人的性格は怎麼搞的 [武漢人の性格がどのようにできたか]」（『武漢人』）で「武漢人の性格はこの都市の性格を代表しており、都市の性格はその文化背景と生存環境によって創り出された」（p.52）と述べ、武漢人と武漢の関係を指摘している。以下に「武漢人」の背景になったと考えられる武漢の性格を見てゆく。

### 3. 武漢の位置—北方か南方か

武漢市は「武漢三鎮」と言われるように、1949年に漢口、漢陽、武昌の三鎮が統合されてできた都市である。一般に漢口が商業区、武昌が文化区、漢陽が工業区と言われており、それぞれが独特の雰囲気を持っている。現在、一口に「武漢人」と言っているが、その特徴のほとんどが漢口の下町を中心としたものである。池莉は「武漢の形成を簡単に振り返ってみても、武漢のバラバラさは容易に理解できる。解放後にやっと3つの鎮が1つになって武漢市ができ、武漢人という概念もまたこの40年余りに形成されたにすぎない。地理的な要因は盤上の砂（団結力に欠ける）という武漢人の性格を養成した」（『武漢話題』『真実的日子』 p.177）と述べ、「武漢人」の歴史の浅さと地理的・歴史的な要因によって武漢を1つの特色として捉えることができないことを指摘している。

では中国における武漢の位置とはどのようなものであろうか。「武漢は、南方か北方か」という問いに対しては、概して北方に属すと言う答えが返ってくるであろう。確かに武漢方言は北方方言の1つであり、北方文化に属している<sup>16)</sup>と考えられる。しかし、実状は単純ではない。

北方人は基本的に武漢が北方とは認めず、武漢は南方だと言う。しかし武漢弁と南方言語は正確には少しも似ていない。

(池莉「武漢話題」『真実的日子』p.172)

困ったことに武漢はあいにく南北の中間に位置し、南方では北方、北方では南方と思われている。南方のオフィスに冷房が付いたとき、武漢は北方とみなされ、北方の家に暖房が付いたときは、武漢は南方とされたのである。

(「武漢人的性格是怎麼搞的」『武漢人』p.53)

このように、武漢というのは北方でもあり南方でもあり同時に、どちらにも属さない地域と化していることが分かる。これは武漢の位置と無関係ではない。つまり、武漢は中国の中央部に位置し、「九省通衢」と言われるように四通八達之地として栄えてきた。このため、様々な地域の人々が行き交う。その結果武漢の文化も様々な地域の影響を受けていると言われている。これが武漢が中国各地の特徴を併せ持ち、独自の文化がないとされる所以である。方方もこのような武漢の特徴を武漢料理を用いて以下のように語っている。

武漢という都市は「九省通衢」という地域特性のために、長期に互り南北各地の人々が行き交う水の如く行き交った結果、武漢本来の地方特色は薄らいでしまった。武漢料理（武漢菜）について言うと、天下の味を合わせ持ち、しかも独自の固有の風格がない、特徴がないというのが恐らくは武漢料理の最大の特徴であろう。〔( ) 内、原文〕（「武漢人的菜桌」『武漢人』p.35)

しかし、これは所謂大皿料理のことであり、武漢の食の最大の特徴を持つ「小吃」についてではない。池莉も同じように「湖北料理（湖北菜）」という言い方で、「湖北料理の特徴は多すぎて、一言では言い尽くせない。『雑』の一字だけで表した方がよい。私たちの料理を『雑菜』と呼ぶ。この『雑』という字はあまりよいものではないかもしれないが、有名になれば独特の風格になるだろう」（武漢

<sup>16)</sup> 長江を南北を分けるラインとした場合、北方文化に属す。ただし、農作物や「南船北馬」という文化的特徴からすると、やはり南方文化に属すと考えられている。竹内実『現代中国の展開』（NHK ブックス、1987）などでは、淮河と秦嶺を結ぶ北緯 35 度ラインで南北を分けるのが適当とされる。

話題』『真実的日子』p.198)と述べている。池莉の場合は湖北(武漢)の料理は各地の特色を具えていることは認めているながらも、特徴がないとは考えていない。また方方のように「特徴のないことが特徴」とも考えておらず、特徴がないと言われていることに不満を感じている<sup>17)</sup>。ただ2人に共通しているのは、具体的な幾つかの料理を武漢料理として挙げながらも、武漢料理の特色を詳述していない点である。特徴がいろいろあると書く池莉でさえ「湖北には本当に料理が多すぎて、簡単にその特徴を概括できない」(同上、p.197)としか記していない。ただし、池莉はその記述の後に「湖北は南北の料理を兼ね備えることができるが、湖北の多くの料理は余所の人が持つ術はない」(同上、pp.197-198)と付し、具体的には洪山の菜苔や武昌魚などの例を挙げることで、湖北(武漢)料理の2つの側面—中国各地の特色を持ちつつも武漢独自の料理もある—ことを強調している。

以上見てきたように、武漢或いは湖北の大皿料理の特色はやはり中国各地の料理を兼ね備えていることと言える。しかし独自の文化がないのかと言うと、その答えは「否」である。確かに味や調理法は際だった特徴がなく、「雑」と言う以外には特徴がないのかもしれない。だが「武昌魚」や「菜苔」などの存在が、武漢料理にその独自性を添えており、中国各地の特色を併せ持つだけではないという自負を与えている。

方方や池莉、或いは「漢」味を創った作家たちの作品には武漢独自の文化が綿々と綴られている。そのほとんどは「小吃」であり、漢口の下町文化であり、その言語である。作品としては、池莉「冷也好熱也好活着就好」(『小説林』1991年第1、2期合刊)が武漢文化を紹介している最も典型的な例である。また『武漢人』でも「小吃」のみに「武漢人過早 [武漢人の朝食]」、「一碗熱乾麵 [一杯の熱乾麵]」の2章を割り、「小吃」一品一品について詳述し、中国各地の朝食と比較することで武漢における「小吃」の独自性を唱っている。ここでは、北方、南方ということは問題ではなくっており、武漢は「武漢」なのである。そのことは武漢の都市文化への自己啓発であり、対外的な宣伝でもあり、同時に彼らのアイデンティティーの再構築でもあった。

以上のように、武漢が北方か南方かという問題では、方言地図の上では北方に属していると言えるが、中国人の意識の上では北方でもあり南方でもあり同時

<sup>17)</sup> 池莉「武漢話題」第6節・第25節

に、そのどちらでもない地域になる。中国各地の文化を併せ持ちながら、武漢独自の文化も存在しているのが武漢である。そして、この地域特性が「武漢人」の性質にも影響を及ぼしているのである。

#### 4. 方方と池莉

方方と池莉は新写实小説の旗手として、また武漢の現代作家としてよく知られている。池莉、方方の活躍によって、「漢」味が1つのスタイルとして全国的に認識されるようになったのだが、以下に2人がどうして武漢をこのようにクローズ・アップし、力を持ち得たのかを見てゆく。

方方が生粋の武漢人ではないことは先に見た。池莉はどうかと言うと、湖北省仙桃市<sup>18)</sup>に生まれ、父親の仕事の都合で湖北省内を転々とし、その後武漢市に長く暮らす。途中、文革期に湖北省内の農村に下放しているが、実質的には武漢人と言っても構わないであろう。しかし、池莉自身は方方と同じくある種の違和感を抱いている。池莉は「総在異郷 [いつも異郷にある]」（『総在異郷』江蘇文藝出版社、1995）で自分の故郷が存在せず、属するところのない者の「故郷」への憧れを述べている。

そもそも武漢は前述のように、人の出入りの多い商業都市で、湖北の作家の多くが他の地域から来た人であった。そのため湖北或いは武漢独自の文学が育たなかったとされている<sup>19)</sup>。1982年に作家協会側から武漢独自の文学を創るよう働きかけがあったのは、その年に武漢（市）作家協会が成立したこととも関係がある。しかし82年の時点では、「漢」味文学を創るには至らなかった。

池莉「煩惱人生」（『上海文学』1987年8月）と方方「風景」（『当代作家』1987年第5期）が新写实主義として全国的な注目を浴び、それ以降「漢」味のスタイルは出来上がってゆく。彼女たち2人の描く武漢が、武漢の文学を造り上げる力となったのである。それは多く武漢への情熱に支えられているのではあるが、その情熱は彼女たちが生粋の武漢人ではないことと関係しているのではないだろうか。

<sup>18)</sup> 元は沔陽県。1986年に仙桃市に改名された。池莉自身は「湖北で生まれ」（『預謀殺人』中国社会科学出版社、1993）と書くことが多いためか、『新时期文学』（汪時進、呉文祥主編、河北大学出版社、1992）では武漢生まれと書かれている。

<sup>19)</sup> 阪口直樹「湖北文学事情」（『同志社外国文学研究』第52号、1989）に詳しい。武漢市作家協会、湖北作家協会との座談会において、各作家協会の認識としてまとめられている。

方方は『武漢人』の中で董宏猷（児童文学作家）が「境遇と経歴が伝奇的な色合いが濃く、経歴と経験が十分に豊かでもあり、武漢のもろもろのことで知らないことはほとんどない」（p.149）ことから、地方色豊かな文学を創ることに期待を寄せている。しかし董宏猷は方方の期待には添うことがない。その原因を方方は以下のように考察している。

少し穿ってみると、漢口の商業雰囲気濃い市民文化の影響を受けたことから、その束縛とその制約を受けているのではないだろうか。この点は私には答えきれない。（『我認識的幾個武漢人』『武漢人』p.149）

このように逆に生粋の武漢人の方がその束縛—商業ベースを考慮することで受ける制約—を受けやすく、武漢のことをあまり描くことがない。この点は、武漢の文化を対外的にアピールをしようとしないうという武漢人の1つの特徴から来ていると考えられる。

そのことに加え、前節で紹介したように武漢市の歴史は浅い。生粋の武漢人とは、武漢3鎮が統一される前からの居住者、つまり生粋の漢口人あるいは武昌人である。結局のところ、先祖代々武漢で暮らしてきた人々はそのアイデンティティーを漢口ないし漢口の通りなどの場所に帰属させており、武漢市というわずか50年程の歴史しかない街（名称）には帰属させてはいない。そのため、生粋の武漢人と言われる人々には、「武漢人」という意識がないのではないだろうか。例えば、池莉「不談愛情」で、漢口花楼街出身の吉玲が「そうよ、私は生粋の漢口の小市民よ」<sup>20)</sup>と言い放つように、「漢口の小市民」という意識は存在するが、「武漢人」という意識がない。したがって、生粋の武漢人からすると「武漢人」は存在しておらず、また「武漢」を宣伝する謂れもない。つまり、生粋の武漢人は武漢について書かないのではなく、書けなかったのではないだろうか。

ここで、再び武漢料理の例を挙げると、

武漢人の性格は着実である。自宅で食べるのが好きで、また自宅にも（広東料理や四川料理と）似たような料理が幾つもあるのもかかわらず、広東人や四川人のように世界中に出掛け、あちこちに根拠地を置き、自分の故郷の

<sup>20)</sup> 『太陽出世』（長江文藝出版社、1992）p.9

料理を伝搬することはできない。またあちこちで自分の料理を「つくる」文章を書くこともせず、「炒めた」香りを充満させ、余所者に嗅がせて引き寄せようもしない。  
〔( ) 内、引用者〕(「武漢人的菜桌」『武漢人』p.34)

私たち自身の自信の無さと、人様の誤解によって、多くの人に湖北には何も食べるべきものがないという認識を引き起こしてしまった。

(池莉「武漢話題」『真実的日子』p.198)

以上のように、武漢人がその料理を対外的に披露することはあまりない。しかし方が言うように家庭料理が四川や広州に劣っているわけではない。池莉もその料理は「上海人は楽しく食べ、四川人は満足する」(「武漢話題」『真実的日子』p.198) ものであると高く評価している。

このように生粋の武漢人は、文章など形の残るような対外的なアピールをしない。このことは武漢人が内向的であることを意味するのではない。「武漢人の基本的な性格は外向的であり、竹を割ったような性格で、話をするのが比較的好きで、悪く言うと口数が多い」<sup>21)</sup>と方方も述べており、また様々なエピソードから見ても内向的とは言えない。しかし自己(武漢の文化) 宣伝は口頭で行うだけで、形に残そうとはしない。

対して方方や池莉は武漢を作品に描くだけでなく、『武漢人』や「武漢話題」というように武漢人論或いは武漢論も書いている。これは生粋の武漢人ではないがために、あえて武漢をアピールしようとはしない武漢人の特徴を持たず、武漢を描写することができたのである。そして方方も池莉も武漢に長く暮らしており、武昌にも漢口にも居を構えたことがある。しかしながら、生粋の武漢人ではなかったがために、漢口や武昌といった地域にアイデンティティーを求めるのではなく、武漢という地域全体に求めたのである。だからこそ、生粋の武漢人にはできなかったにもかかわらず、彼女たちには「武漢」を1つの概念として捉えることができたのである。つまり、方方や池莉たちこそが「漢口人」でも「武昌人」でもない初めての「武漢人」であり、「武漢人」の概念を紹介し得る存在なのである。さらに、常に抱いている疎外感によってある程度客観的な立場を保っているのである。

<sup>21)</sup>「有趣的武漢話」『武漢人』p.60

ただし、池莉は「湖北」という言い方を比較的よく使用し、方方と立場を完全に同じくするわけではない。これは池莉が湖北出身で、武漢を彼女の捉える湖北の代表と考えているからではないだろうか。湖北は、その特色を武漢を含めた地域など3つの地域に大別でき、実際は武漢だけが湖北を代表するわけではない。黄州出身の劉醒龍は武漢と黄州地域とは分けて描写しており、武漢すなわち湖北とは捉えていない。池莉は生粋の武漢人ではないけれども、「湖北人」には違いがない。つまり、「武漢」として説得力を持たせられない、また自分自身が自信を持っていない部分を、「湖北」に置き換えることによって説得力を持たせ、また自信を持って述べられるようにしているのではないだろうか。方方が全くの余所者と言い切るのに対して、池莉は「湖北」という言葉で自らの微妙な立場と心理を表している。それと同時に、「湖北」と「武漢」を並べることで、これら2つを同義化しようとしているのではないだろうか。

前述したように、武漢は北方でも南方でもなく、同時に北方でも南方でもあるという地域である。この武漢の特性と、武漢人でもなく余所者でもない、そして同時に武漢人であり余所者であるという方方、池莉たちの特性が符合することで、初めて武漢という都市が中国各地の特色を併せ持ちながらも武漢独自の文化も持つことを指摘することができ、また更に「武漢人」の概念も創造できたのである。だからこそ「武漢人」方方や池莉によって、初めて「漢」味というスタイルを創り出すことができたのである。

## おわりに

以上見てきたように、武漢人は中国の中央部に位置するために、人的物的な交流の場であった。そのため中国各地の影響を受け、武漢独自の文化がないとされてきた。しかし実際は独自の言葉—武漢弁を持ち、文化を持つ。それと同時に中国各地の特色も持っている。その2重性が武漢の特徴でもあり、武漢の独自性が認識されない要因ともなっている。

しかしながら生粋の武漢人は自ら進んでこの誤解を解こうとはしなかった。これは1つには武漢人の自信の無さ、田舎者蔑視に代表されるような劣等感により、対外的なアピールを行おうとしなかったからである。また生粋の武漢人と呼ばれる人たちは、実際の所は漢口や武昌にそのアイデンティティーを帰属させており、「武漢人」という概念が希薄であった。そのため、かえって方方や池莉のような

生粋の武漢人ではないが長期に亙る武漢生活によって実質的に武漢人と言える人々により、「武漢人」の概念が造り上げられていった。更に武漢の持つ南方でもなく北方でもなく、そして同時にそのどちらでもあるという空間的条件が池莉や方方の条件と符合することによって、より強く彼らのアイデンティティーが帰属することになったのである。これにより、武漢の独自性が浮き彫りになるとともに、中国各地の特徴も備え持つという中間性も明らかにされた。

つまり方方『武漢人』などの武漢（人）論が生粋の武漢人ではない作家によってのみ語られるのは、武漢人のようなコンプレックスがないことに加え、彼らのアイデンティティー問題と関係している。方方や池莉はいずれも、武漢にいながらある種の疎外感を感じている。そのため、武漢人論を創り上げてゆくことが、自らのアイデンティティーの構築にも繋がっていったのである。またこのような動きが、従来意識の上で存在しなかった「武漢人」の存在を造り上げる契機ともなったのである。

これらの武漢人論は大部分が池莉や方方のある種の愛情に支えられていると言えるが、世代的な「尋根」という動き、そして池莉、方方が生粋ではないために、「故郷」に対する希求が「漢」味を生み、客観性とその後の発展への原動力となったのである。

## 主要参考文献

- 柯靈主編『当代中国作家隨筆精選』上・下 東方出版中心、1996  
魯迅等『北人與南人』上・下 中国人事出版社、1997  
毛時安主編『都市的声音』 山東友誼出版社、1997  
王安憶『独語』 湖南文藝出版社、1998  
張勳『新時期文学現象』 文化藝術出版社、1998